

ぎふぶつぼう

2012.11 109

- 悠久の音楽—雅楽(酒井信導) ● 三河の古刹 柳堂・妙源寺
- コラムしょうしんげ ● 「救い」とは何か? その4
- 一枚の寫眞の記憶—のすたるじっく・ふおと—



三河の古刹 妙源寺(山門)

愛知県岡崎市大和町字沓市場

一枚の寫眞の記憶

—のすたるじっく・ふおと—

昨年(2011年)は、大災害に見舞われ、また宗門においては「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」が、つががなく、厳修された、まさに激動の年であった。

本年以降、本山に引き続き各地の別院、一般寺院(末寺)などでは順次、御遠忌が勤まっていくのだろう。ある人が「末寺の御遠忌はお祭りであんなにじゃ。」なんて言っていたが、みんなどんな思いで勤められるのだろうか？

もちろん修復なども含めての法要なのだろうから、めでたいには違いないが、あの時感じた思い、怒り、感動を引き継いで、勤めてもらいたいものである。(皆さん既に忘れてませんか?)

写真は、羽島市の某寺院の、宗祖七百回御遠忌法要の役種児たちと思われる(詳細は不明)。アルバムには「1959(昭和



34年4月」と記してある。確か宗祖の七百回御遠忌は1961(昭和36)年だったはずなので、どうも2年ほどフライングして勤めたようだ。彼女た

ちは今確実に還暦を過ぎているはずで、今回の御遠忌のお稚児さんたちも、50年後にはその年齢になる。どんな思いが繋がっているのだろうか。

**岐阜教区 宗祖親鸞聖人
七百五十回御遠忌法要**
2014年4月26日(土)~29日(火・祝) 厳修

編集後記

もうすぐ3歳になる息子が夜遅い時間になってもなかなか寝ない。「ハイ寝んね」というと目をあけたまま「ガーガー」といびきをかく真似をする。どうやら私の寝姿を普段からよく観察しているようだ。そういうえば、扇風機のスイッチを足で消しているところも見たことがある。子どもから自分の姿が教えられる。

一方、私の実家のお寺に行った時、また連れ合いの実家に行った時も、必ず阿弥陀さんの前に正座して「まんまんあん」としてくれる。こちらはたまにある、嬉しい真似事である。今度はその阿弥陀さんをいただいていく姿を息子に伝えていかねばならない、と思うこの頃です。(敬意)



悠久の音楽

雅楽

酒井信導

雅楽は神社のお祭りや結婚式で演奏される音楽、というぐらいの知識しかもっていない人が多いと思います。

1972(昭和47)年の文部省の教科書改訂のときに、中学二年の音楽の鑑賞教材に「越天楽」という雅楽曲が必須として採用されました。そして、いちおう義務教育の過程で、雅楽についての勉強は済ませているはずなのですが、ところが、西洋音楽についてはよく知っている先生が、雅楽については全く知らず、授業で雅楽を省いていると聞いています。せつかく日本人が日本の音楽に

ついて学ぶ機会を与えられていないから、これを教える立場の人が行わないのは残念なことです。雅楽とは、もと俗楽に対する雅正の楽(朝廷の式楽・正しい音楽・みだらではない音楽)の意で、古来の外来の音楽と舞を指しました。もともと雅楽は仏教と同時に伝来し、「古事記」や「日本書紀」に神話や伝説として記されています。これらは現在でも神社の祭祀楽として用いられています。

仏教が我が国に入ったのは欽明天皇の時代の538年頃ですが、仏教を広める為に努力された聖徳太子は、「仏教が盛んになるには、仏を供養するのにいろいろの雅楽を奏するのが最もよい」と言われ

ました。その為に太子は、大阪の四天王寺に樂所を作り、樂人を家業として育てられたのです。以来有名な樂師の子孫に当たる人も現在でも活躍してみえます。

浄土真宗においては、蓮如上人が教化方法のひとつとして、能・狂言を積極的に導入したことから、宗派の重要な法要には必ず行われました。本願寺においては、1561(永禄4)

年の、宗祖三百回忌以降に大法要に限り雅楽が依用されました。それは東西分派の前頃で顕如上人であります。以来ご本山では毎年4月の春の法要、11月の報恩講には入樂法要が勤まり、御遠忌法要のような大法要には、法要楽・舞楽・能楽と参堂列の演奏もあります。雅楽の楽器には、管楽器、絃楽器、打楽器の三種類に分けられています。



管楽器は、笙・篳篥・横笛。絃楽器は、琵琶・箏。打楽器は、太鼓・鞆鼓・鉦鼓です。



管楽器

笙(鳳笙)は、天より差し込む光を表現し17本の竹を円筒状に組み合わせ、浄土の鳥とも言われる鳳凰を模した和音中心の楽器。篳篥は、地にこだまする人の声を表す、主旋律を奏する縦笛。横笛(龍笛)は、空を舞い立ち昇る龍を表し、音に抑揚をつける役割の古典的な横笛。

絃楽器

絃楽器は琵琶と箏を使います。



打楽器

太鼓は、大きくリズムを刻むもの。鞆鼓は、鼓状の太鼓で左右を撥で叩くもの。鉦鼓は、金属製の器を叩くものです。それぞれの音が重なり合い響き合って、浄土の世界を表現するのです。

三管(笙・篳篥・横笛)の楽器の材料は竹で、それは女竹の煤竹。藁ぶき家などに使われていた古い家のカマドから出る煙の油煙で、黒く煤けたものがよく乾燥し、虫がつかず、堅くなっているのが、珍重されています。

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要には、本願寺能・法要儀式附楽、参堂列、法要舞楽が予定されていました。但し、東北地方太平洋沖地震を深刻に受けとめ、歌舞音曲を自粛するということが、とりやめることになりました。法要舞楽は、仏祖を莊嚴する樂のことで、大法要のみ行う舞で、結願日中に雅楽の演奏に合わせて舞による莊嚴が行われます。法要附楽は、僧侶の勤める声明旋律にあわせて、雅楽器で伴奏します。これを附物と言います。しかしこの度の御遠忌法要で



は、雅楽は一切行いませんでした。そこで附楽は音曲かと疑問を感じます。正信偈、和讃も歌であり、歌舞音曲を自粛するという理由で附楽を行わなかったとの判断であれば、寂しい思いがします。日本の伝統的な音楽や舞である雅楽は、その音色の中に悠久の莊嚴さを表現しています。それは人びとの心の依りどころとして大切に古来より伝承されてきているのです。すこしでも身近な古典音楽として、感じていただければ幸いです。思います。

三河の真宗③ 三河の古刹

柳堂・妙源寺

やなぎどう・みょうげんじ(真宗高田派)

愛知県岡崎市大和町字岩市場



妙源寺柳堂

妙源寺の境内に足をいれると、檜皮葺の美しい小堂が目に入った。柳堂と呼ばれるお堂である。

柳堂は、親鸞聖人が関東から京都に戻る際、説法をされたところである。妙源寺の初代住職が河内国安部野からこの地へ移住する時、聖徳太子自作の太子像を納めるために建てたものであるという。

以前は太子堂と呼ばれていたが、堂の前に柳の大樹があったことから、柳堂と呼ばれるようになったといわれている。

うになったといわれている。妙源寺柳堂は、1258(正嘉2)年の創建とされ、親鸞聖人が関東より帰京する途中、この太子堂で17日間、説法をされた。この時、三河三カ寺も共に真宗に帰順し、三河に真宗が弘まることとなった。



柳堂堂内

柳堂を左手に見ながら、まずは妙源寺住職よりお話を聞くため本堂内へと進んだ。しかし住職の口からは、「親鸞聖人七百五十回御遠忌が済んでから、お東(大谷派)の僧侶が今頃ここ(高田派)へ何しに来た!」と怒りをあらわにされた言葉が……。元々三河一帯は親鸞の教えを弘めようとした高田の真仏、顕

妙源寺本堂



智、専信が精力的に念仏布教をされた所で、高田派寺院が熱心に真宗を弘めていった場所である。そこへ蓮如がやってきて凄まじい勢いで、あつという間に転派させていった。住職の話によれば、蓮如は高田派から転派させるために親鸞の三河真宗の最初の道場といわれている妙源寺(柳堂)の事実さえ歪めようとしたという。東西本願寺は蓮如教だと揶揄され、特に東(大谷派)は今でも妙源寺(柳堂)の歴史と事実を歪めようとしているという。

はたして本当に蓮如が歴史を歪めてまでも高田派からこの地を奪い、自らが目指す真宗(親鸞)の教えを弘めようとしたのかかわらないが、三河一向一揆の時に蓮如によって転派した三河触頭三ヶ寺に対峙し、家康側についたこのお寺には、今でも蓮如と真宗大谷派への憎しみが脈々と受け継がれているように感じた。

さて、三河にはもう一つ柳堂とよばれているところがある。真宗大谷派の勝蓮寺である。もと



勝蓮寺本堂

は天台宗で薬師如来を矢作の里の柳樹の元に御堂を建てて納め柳堂薬師寺と称したことはじまるといわれている。親鸞が帰京する途中勝蓮寺を訪れた際、法弟となり法名を受けて真宗に改めたとされる。



山門を入るとすぐ横に親鸞の柳堂説法の案内板がある。本堂に入ると坊守さんが対応して下さり、自坊の寺史を説明しながら話は柳堂説法へと。妙源寺柳堂の事にも触れながら、話を終え本堂を出ようとすると、「柳堂は、うちよりも本堂はあちらさんの方が……。」と、言葉をごされた。それぞれの歴史をもちながら、思いを重ねながら柳堂がある。



勝蓮寺山門瓦

しかしこの矢作の里に親鸞が滞在し三河の真宗の礎となつた事は確かな事であり、それにより現在

親鸞聖人が腰を下ろして、説法を行ったとされる(勝蓮寺)

数多くの真宗寺院が点在している。その三河の風土には真宗のころが今もふかく根づき、そこ

かしこには長い歴史をへた信仰の姿、そして歴史が息づく寺院をみることができるのである。
*敬称は略させていただきました。

しょうしんげ

遊煩悩林現神通 入生死菌示応化

我々の遊びは、自分(自分たち)だけの癒やしや楽しみをもとめる身勝手のもので、遊びによってかえって自らが縛られ、不自由さや空しさ、怒りを感じたりします。

では、仏教における遊びとは、どういうことなのでしょうか。

仏教には「遊戯(ゆげ)」という言葉があります。悩める人々の心を開いて教化していく大悲の行が、遊戯です。

遊戯には二つの意味があります。一つの意味は自由自在、思うがままということがあって、人間の計らいとか努力というものを必要としません。もう一つ

遊煩悩林に遊びて神通を現じ、生死の園に入りて応化を示す。

は度するということ。度するということとは、渡す、救うということ。迷いの世界から悟りの世界へ渡すということ。遊戯とは、悩める人々を救うという大きな仕事をしながらも、そこには救うという計らいや意識、執着が全くありません。どんなことをしても一切の執らわれをもたない、ただ為すべき事をなし、その為すことに満足していく。あるがままということ。遊戯の世界から迷いの世界へ帰る、敢えて積極的に苦悩を引き受けて生きる「還相(げんそう)の行」の真実のあり方の究極に、仏教における遊びがあるのではないのでしょうか。



1 法蔵菩薩の「願い」に始まる仏道

正信偈三句目に「法蔵菩薩の因位の時、世自在王仏の所にましまして…」と続きます。迷い苦しむ人々を救いたいと願い、その苦悩の原因はいったい何なのかを徹底的に明らかにしようとする法蔵の決意が「因位」という語から覗えます。そして、その願い

目を背け、迷いのままに少々長生きしたところで何になろう。限りある身の事実を知らせ、迷いから眼を開かせる教えこそ永遠の真実ではないのか。「七高僧ものがたり(大意)」

この菩提流支の叱責により、曇鸞は苦勞して持ち帰った仙經十卷(不老長寿の聖典)を焼き棄て楽邦(浄土)に帰したのです。

「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。『數異抄』」

親鸞聖人は師法然上人との出会いを通して、根底から自己が変革されたことを「雑行を棄てて本願に帰す」と告白されます。

また、法然の「選択集」を写真し、法然の真影を图画し、真筆で銘文を書いていただいたことを「専念正行の徳」とし、「決定往生の徴」と示されています。正に、この師の教えの確かさと深い恩徳への慶喜の心を書き願ったものが

を実現するため師の世自在王仏を訪ね、教えを請います。

そこで師の徳を讃え(嘆仏偈)、さらに諸仏の浄土や浄土に至った人々の善悪をことごとく観察し、類稀なる大きくて深い「願」をお建てになります。そして、「願い」は「誓い」となり、その誓いを全うするために五劫の間、いかに漏れることなく一切の人々を救うことができるかを思惟され、我が名(南無阿彌陀仏)とその名に施される無上の功德が十方にゆきわたり聞こえていくことよって救いを完成せんと重ねて誓うてくださったのです(重誓偈)。

法蔵は過去の仏教のとてつもなく長くそして深い五十三仏の歴史と伝灯を受け継ぎ、ここに衆生救済の大いなる「誓願」を成就されていきます。私たち人間は、結果を尊重し、「一喜一憂しつづ」「浮生」の日々を過ごしています。が、迷い悩む私たちの根本にいったい何があるのかを見つめる眼を持ちたいものです。「凡夫というは、無明煩惱われらがみにみち

「教行信証」である。確かな出会いによって、一歩前を歩んで私の手を引いてくださる「得道の人」に出会うことよって、阿彌陀の光に出会うことができるのです。

そしてそれは、本當の私、心の奥底の私(仏性・如来性)との出会いを意味します。

たった一人の「よき人」との出会いが、今まで関わってきたすべての人が、実は私にとって光だったことに気付く瞬間でもあります。夜空に輝いた一つの星を見つけたら、空全体が満天の星空であつたと気付かされるのです。



3 私が救われるとは?

「今、いのちがあなたを生きていく、親鸞聖人御遠忌のテーマです。繋がり合う、支え合う無限の「いのち」があなたの身体を

みちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころをおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず…。「一念多念文意」

真実に暗いわが身の本性に気付かされた時こそ私が光に照らされた時であり、人間らしく本當に生きる人生が始まる時なのです。

「この光に遇えば、三垢消滅し、身意柔軟にして、歡喜踊躍し善心を焉に生ず。もし三塗・勤苦の処にありてこの光明を見たてまつれば、みな休息することを得て、また苦惱なけん。『仏説無量壽經』、悲しくも私たちが真実に暗い存在であるからこそ、法蔵菩薩が救わずにはおれない「誓願」を建ててくださったことに深く頭が下がるのです。

2 得道の人に出会うことは、本當の私に出会い直していくこと

生きていく、それもあなたの意思を超えたところで。では、「今」とは如何なることか? 「前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。『安樂集』」

過去を生きた先達の願いに出会い、その思いを「今」あなたが生きている。また、あなたが受け継いだ「願い」というバトンを次の世代に送っていく、その未来世の人々のいのちも、今、あなたの身体を生きている。今とは過去のいのち、そして未来のいのちをも引き受けて、今、生きている」ということなのでしょう。

故に、あなたの救いは、普く諸の衆生と共に救われることよって初めて成り立つのです。現代社会は、ますます混沌の度を深め、資本という巨大な怪物に支配され、生まれてきた喜びを実感することも難しく、悲惨な生存競争の中で多くの者が自らに表現されます。どう生きれば私たちは「光(教え)」に出会うことができるのでしょうか。

韋提希が釈尊に出会う場面です。ありつたけの愚痴をぶつける場面から清らかな世界を望んでいく身が変わっていきます(清浄業処)。釈尊は沈黙を保つのですが、自分の思いを満足させてくれる四つの諸仏の国土を示されます(光台現国)。しかし韋提希はその世界を選ばず阿彌陀の浄土に生まれたいと願います(韋提別選)。

その時、釈尊は微笑んでその選択を見守ります。釈尊の足元を見向き合う現実の中に阿彌陀の浄土があることを感得していくのです。そして仏願力によって真実を正しく受けとめ、「無生法忍(覚り)」を得ていく物語が觀經に説かれていきます。釈尊との出会いとそのおしを通して、自らが主体的に浄土に生まれる道を選択していく姿が描かれています。

曇鸞と菩提流支の出会いも大変大きな意味を持つものでした。「人は必ず死ぬという事実から命を絶ち、皆が日々の生活苦に喘いでいます。

皆、生きるために必死です。このままいけば人間が自らの無知と欲望によって自滅する日もそんなに遠くはない気がします。

「弥陀成仏のこの方は、いまに十劫をへたまえり」。法蔵菩薩は阿彌陀如来に成られたことで、つまりは「必死滅度の願」が成就されたことで始まる仏道が浄土の真宗です。

すでに、救いの道は完成しているのですが、救われていくことに気付けない私がおにいます。その私を自覚めさせんがために如来は菩薩に還り、今も絶えることなく救いの御手を差し伸べ衆生救済のために働き続けておられることでしょう。しかし、その「難度海を度する大船」に乗るか、乗らないかの最終判断は私たちに託されています。誤解を恐れず申し上げれば、「法蔵菩薩の本願」は最後にわたしたちの歩みによつて完成されるのです。あなたはこの船に乗りますか?